

〔学院情報〕

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程開講式

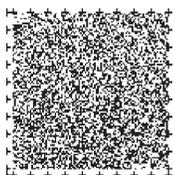
脳卒中リハ看護認定看護師教育課程教官 加藤かほり

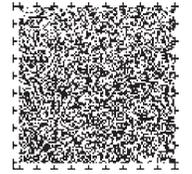
秋晴れの爽やかな風の吹く中、10月3日10時から、当センター学院大研修室において、研修生11名を迎え、日本看護協会、日本リハビリテーション看護学会等から多数の来賓の皆様のご出席の下、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程の開講式が執り行われました。



式典の中では、中島学院長から式辞として「脳卒中の患者は急性期・回復期・維持期と長い時間軸の中にいます。研修生の方は急性期の現場にいる人も回復期の現場にいる人もすべての時期の学習ができるようなプログラムを用意しています。それぞれの施設で指導できるようしっかり学んで下さい。」と述べられ、続いて、センターを代表して中村自立支援局長より「医療の進歩、社会経済の発展により、慢性疾患の管理や予防が社会的な課題となっています。その中では、脳卒中による運動障害や要介護者の増加が予測され、看護師の役割は極めて大きいといえます。」と祝辞を述べられました。

引き続き、日本看護協会会長、日本リハビリテーション看護学会理事長から来賓祝辞があり、今後、認定看護師としての活躍を期待するとともに当教育課程への協力・支援を行っていきたいとお祝いのお言葉をいただきました。





幼児吃音の治療法-Lidcombeプログラム-に関するワークショップに参加して(オーストラリア出張報告)

学院 言語聴覚学科 坂田善政

去る9月8・9日、オーストラリアのシドニー大学で開催された、Lidcombeプログラムに関するワークショップに参加した。Lidcombeプログラムとは、シドニー大学に設置されているオーストラリア吃音研究センターの研究者と、Bankstown健康サービス吃音ユニットの臨床家によって開発された、幼児吃音の治療プログラムである。そのエビデンスレベルは、各国で行われている様々なアプローチの中で最も高く、現在世界中の臨床家から注目を集めているプログラムでもある。

私は今年度、財団法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「言語の普遍性と個別性を考慮した言語障害の症状の解明とそのセラピーの探究(研究代表者：豊橋技術科学大学教授 氏平 明)」において「吃音と構音障害の言語学的側面を考慮したセラピーの考案」を担当する分担研究者となっている。幼児吃音に関する新たなアプローチについて検討する上でLidcombeプログラムについて理解を深めることは必須であるため、この研究の一環として、今回のワークショップに参加した。

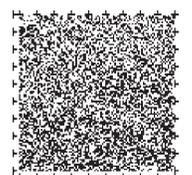
LidcombeプログラムのLidcombeとは、シドニー近郊にある町の名前である。シドニー中央駅から電車で15分ほど揺られると、ほどなく会場の最寄り駅であるLidcombe駅に着く。駅からバスで5分ほどでシドニー大学Cumberlandキャンパスに到着する。このキャンパスにあるオーストラリア吃音研究センターにほど近い建物の一室で、ワークショップは開催された。

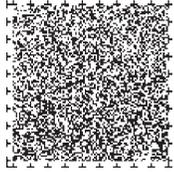


(写真1) ワークショップの様子

会場には、講師であるVerity Macmillan先生とMary Erian先生のほか、40名の言語聴覚士が集まった。オーストラリア以外からの参加は私のみであったが、皆、臨床現場で幼児吃音のケースを実際に担当している言語聴覚士である。

スケジュールは両日とも午前9時から午後5時まで。モーニング・ティーとランチ、アフタヌーン・ティーという3回の休憩を除いては、講義と演習、グループディスカッションが続く。グループディスカッションの際はもちろんのこと、講義中も盛んに質疑応答が行われた。講義や演習では臨床場面のビデオが頻繁に用いられ、クリップの数は実に34を数えた。この映像によって、文献のみでは理解することの難しかったLidcombeプログラムの実際について理解が非常に深まった。また、Lidcombeプログラムについて学ぶ以外にも、休憩時間には他の参加者からオーストラリアにおける吃音治療の現状につ





いて話を聞く機会を多くもつことができ、有意義であった。

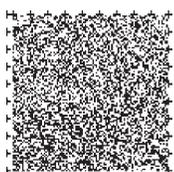
このプログラムは、実施する前にLidcombeプログラム指導者協会が主催する正規のワークショップ（今回のワークショップもこれに該当する）に参加することが強く推奨されている。しかしながら、現在までにこのワークショップに参加した経験をもつ日本の言語聴覚士は、私を除くと北里大学の原由紀氏のみとのことであった。帰国後、原先生とも情報交換を行ったが、北里大学では現在、日本へのLidcombeプログラムの適応可能性を探っている段階とのことである。

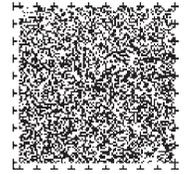
今回のワークショップに参加しての何よりの収穫は、Verity Macmillan先生とMary Erian先生から、Lidcombeプログラムを日本で行う上でのスーパーバイズをご快諾いただけただ点である。日本でLidcombeプログラムを行うには様々な工夫が必要であることが予想されるが、今後は当センターでもこのプログラムの適応可能性を探っていきたい。

今回は、到着した7日こそ会場の下見の後、有名なオペラハウスとハーバーブリッジ周辺を散策する時間をとることができたものの、8・9日は終日ワークショップに参加するのみで終わり、翌10日は午前8時15分発の帰国便に乗るため午前5時半にホテルを出発。忙しい日程ではあったが得たものは多く、充実したオーストラリア出張となった。



(写真2) Verity Macmillan先生(右)とMary Erian先生(左)





「卒業生の活躍状況」

学院視覚障害学科教官 小林章

今回は当学科の卒業生であるNPO法人アイパートナーの奥村伊澄さんにお話を伺いました。

奥村さんは平成19年3月に国立障害者リハビリテーションセンター学院視覚障害学科を卒業し、現在、三重県津市に事業所があるNPO法人アイパートナーに勤務されています。アイパートナーは視覚障害者の自立支援施設のない三重県にあって、スタッフ4名で三重県全域を訪問し、年間述べ2000件もの生活訓練を、個人の状況に応じて提供している事業所です。

Q1 アイパートナーの業務内容を教えてください。

A1 視覚障害者の自立生活の実現のための各種訪問訓練を主な業務として行っています。視覚障害が原因で困っている事柄ややってみたいけれどできないだろうとあきらめている事柄などに対し、どうしたら安全にそれらのことが可能になるのか、助言をしたり、本人と相談したり、練習をしたりして、実現させていきます。

また、障害福祉に関する講習会の主催、講師派遣なども行っています。

Q2 奥村さんは具体的にどのような仕事をしているのですか。

A2 主な仕事の内容は、訓練受講者の自宅や希望する訓練場所に行き、その方に必要な訓練を行っています。

訓練内容は、初回に初期面接を行い、実施する内容を決めています。

訪問範囲が三重県内と広範囲なため、あらかじめ訪問する地域を決めて、訓練の予約を入れています。日や地域によって違いますが、1日にだいたい



活動拠点の津市市民センターにて

左：NPO法人アイパートナー代表 前川氏
右：奥村伊澄さん（16期生）

たい3件の訓練を行います。

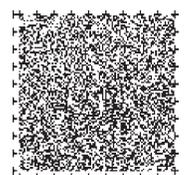
訓練終了後は、スタッフが集まり、訓練の進め方について話しをしたり、勉強会をしたり、事務作業を行ったりしています。

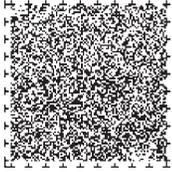
Q3 現在の職場に就職した理由を教えてください。

A3 アイパートナーに就職した理由は、視覚障害者への訓練数が多く、学院で勉強した内容が活かせると思ったからです。また、実習でお世話になったとき、上司や先輩の視覚リハや訓練に対する考え等に感銘を受け、この職場で働きたいと思ったからです。

Q4 仕事で心がけている点、やりがい、苦労等について教えてください。

A4 仕事で心がけている点は、訓練受講者に感覚のすばらしさを実感してもらえるように訓練を進めていくということです。訓練の中では、視覚以





外の他の感覚を利用する方法を練習することが多くあります。その際、その練習を後ろ向きに捉えてしまわないように、人間の感覚は豊かで素晴らしいことを実感してもらい、こちらが考えている目的を誤解のないようにしっかりと伝え、前向きに捉えてもらえることが多いです。そのような訓練の中で、その方ができなかったこともしくはしたかったことが出来るようになり、一緒に喜んでいる時が、やりがいを感じる時です。

Q5 学院の視覚障害学科を志望した理由を教えてください。

A5 リハビリテーションに関わる仕事がしたいと考えていたときに、視覚障害者に対するリハビリを学べる場所があると知りました。それまで視覚障害の方と接する機会がほとんどなかったのですが、なぜか興味を持ち、勉強がしてみたいと思

ったのが志望した理由でした。他にこれほど視覚障害のリハビリテーションを多角的に深く学べる場所はないと思います。

Q6 後輩達へメッセージをお願いします。

A6 訓練現場では、臨機応変な対応が求められることが多いです。学院でたくさんのことを学ぶと思いますが、その知識を相手に合わせて出せるように、いろいろな角度から考える練習をすると良いのではないかと思います。2年間は、あっという間に過ぎていきますので、この間にできることは何でもしておこうというくらいの気持ちで過ごしてください。また、学院でできた友人のネットワークは仕事をしていくうえでも大きな財産になりますので、友人と楽しく過ごす時間も大切にしてください。

